四季おりおり

1階展示室2（旧婦人室）では貞奴や桃介が愛用していた着物・帯などを展示しています。これらは貞奴の孫である川上初氏より寄贈されたものです。

約30点の寄贈品の中から季節に合わせて年10回ほど展示替えを行っています。今回は春から初夏にかけて行った展示替えをご紹介します。

羽織と帯

羽織は黒地に背中と袖にくずし紋。裏地はベージュに桐の花紋様。帯は緑帯。両側に三本のストライプ入りの博多帯。

着物

錦紗に「しだれ桜」紋様の色留袖で、川上家の家紋である「九枚笹」の紋入り（五ツ紋）。

揃いの裾模様の中着を合わせて、二枚同じ模様が重なって見える。

着物と帯

着物は絽で、蛍の紋様がある。福沢家の家紋である「抱き割楓」の紋入り（二ツ紋）。

襦袢は麻地で、葦と蛍の紋様。

帯は塩瀬の手描きの袋帯。ツバメが飛び交い、下方には柳の枝の下を泳ぐおたまじゃくしが描かれている。

文化のみち逍遥 その土

【カトリック主税町教会】

名古屋市東区主税町三丁目33

【指定】国登録文化財／都市景観重要建築物

忙しく車が行き交う国道41号線に面して、木々の緑に守られるように静かにたたずむ教会があります。イギリス積みの煉瓦塀に周囲を囲まれ、背後にそびえる大きなケヤキの木が印象的なその教会は、東海三県下では最も古い教会として知られる「カトリック主税町教会」です。

この地にカトリック教会が置かれたのは明治20年。パリ外国宣教会のフランス人宣教師テュルパン神父によって建てられ、当時は『天主公教会』と呼ばれていました。主税町界隈は江戸時代、三百石級の武家が住んだ屋敷町でしたが、テュルパン神父は当時この地に建っていた武家屋敷を購入し、改築して教会として使用しました。その後この教会は長く東海・北陸地方の伝導の中心になったと言われています。

司祭館は、昭和5年に建てられ、信者会館・煉瓦塀とともに、国の登録文化財となっているほか、礼拝堂とともに都市景観重要建築物に指定されています。

名古屋空襲を奇跡的に免れたこの教会は、戦後教会を失った各地の教徒を受け入れるために礼拝堂が増築されたり、国道41号線の道路拡幅工事のために教会の土地と建物の一部を削られたりと、時代によって数奇な運命を辿っています。礼拝堂と同時期に建てられた鐘楼も、国道41号線の工事のため一度は撤去され、平成2年に復元されました。鐘楼の中の鐘は明治23年にフランスのマルセイユで製造されたもので、一昔前までは日曜日のミサの際に毎週鳴り響き、教会は地域の方に『ガンガン寺』と愛着を持って呼ばれていたそうです。

教会の立派なケヤキの木は昔の武家屋敷の名残の木と推測されています。文化のみち界隈の特色のひとつに、大木が多く緑が豊かなことがあります。細い路地の塀越しに覗かせる大木の枝葉は屋敷町の面影をも見せてくれます。緑の美しい夏の文化のみちで、ゆったりと時代の流れを感じてみるのもいいかもしれません。

太正モダニズム建築の粋を見る ⑨

蔵

二葉館の中庭に蔵があるのをご存知でしょうか。和室の廊下から中庭に目をやると、どっしりとした黒い土戸のある白漆喰仕立ての土蔵を見ることができます。内部は一般公開されていないため関係者以外立ち入ることはできませんが、今回は写真とともに少しだけ蔵についてご案内させていただきます。

現在の蔵は外観・内観ともにオリジナルのものにできるだけ似せて再現されていますが、実は鉄筋コンクリート造に漆喰塗仕上げを施したレプリカです。大正創建当初の蔵は土蔵でしたが、耐火のため鉄筋コンクリートに変更して復元されました。蔵に付いている大きな黒い土戸はオリジナルを修復して使用していますが、開けても壁になっているだけで中に入ることはできません。大正当時はこの土戸が出入り口でしたが、現在は書庫棟の中からのみ蔵に入ることができます。

さて、蔵の中をご案内いたします。蔵の内観はほぼオリジナルの木材を使って再現しており、2階に上がる急な階段も当時の通り再現されています。

蔵は現在書庫棟の一部として資料の保管や整理のために活用されています。

昔から日本では、蔵は倉庫や保管庫として利用されており、その伝統的な建築様式はノスタルジックな魅力からか、現在多くの地域で観光・商業施設としても活用されています。大正当時、どんなものがこの蔵では保管されていたのでしょう。貞奴の宝物を思い描いてみてはいかがでしょうか。

書庫棟から

書庫で書籍資料の整理をしていると、手紙や献本の短冊に書かれたメッセージ、挟んだままになっているメモなどの覚え書、写真といったものが時折出てきます。

作家が持っていた資料本の中には、書込みがたくさんあるものもあり、そんな足跡?を見つける度に、執筆中の状況や作家の息遣いが聞こえるような感じを覚えます。

昨今、こうした書き込みが残る古書の事を「痕跡本」と言って注目されているようです。元の持ち主が目に浮かんで楽しくなる、持ち主の物語が刻まれているというのが人気の理由だそうです。

二葉館の蔵書はそんな「痕跡本」がたくさんあります。それは作家本人の痕跡であり、作品がいかにして出来上がったかなどの手がかりにもなるため、挟まれていたメモ等もふくめて、大変貴重な資料です。走り書きの文字やびっしりと書き込まれた様子から、色々と想像をめぐらせてみるのも楽しい事ではありますが、記録を取って背景を調べながら、展示でどのようにお客様にご覧いただくかも考えつつ整理を進めています。

その他に、交友のある著者からサイン入りで贈られている本があります。いわゆるサイン本ですが、作家同士のつながりであったり、贈った作家の個性あふれる直筆サインが見られたりと、こちらも興味深い資料です。

城山三郎や春日井建の寄贈書には、書き込みのある本やサイン本が多数あります。常設展や企画展など折に触れて展示を行いますので、どうぞご覧ください。